

**<学会記録II>24. 歯科におけるクリニカル・パスの導入：ホームブリーチ処置パスのバリエーション分析と第二段階パスの作成(東日本歯学会第21回学術大会一般講演抄録)**

著者名(日)	荊木 裕司, 斎藤 隆史, 白井 伸一, 越智 守生, 松田 浩一
雑誌名	東日本歯学雑誌
巻	22
号	1
ページ	107
発行年	2003-06-30
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1145/00008815/">http://id.nii.ac.jp/1145/00008815/</a>

ラレ), グラディア(G.C.)である。完成したインレーは口腔内にて調整後, 接着性レジンセメントにて装着した。

【結果及び考察】症例中不快事項が生じたものは無く, CR修復よりも, 表面の滑沢さや色調等, 患者の満足度

は非常に高かった。また確実な技工操作や接着性レジンセメントを用い合着する事により, 辺縁の適合度等はたいへん良好な結果が得られた。今後, 長期にわたり色調変化等, 経過を追っていく事とする。

## 24. 歯科におけるクリニカル・パスの導入

### ホームブリーチ処置パスのバリエーション分析と第二段階パスの作成

○荊木 裕司\*, 斎藤 隆史\*, 白井 伸一\*\*, 越智 守生\*\*\*, 松田 浩一\*  
(\*北海道医療大学歯学部歯科保存学第二講座・

\*\*オムニデンティクス・\*\*\*北海道医療大学歯学部歯科補綴学第二講座)

【目的】ホームブリーチ法による漂白処置については, 近年の国民の審美性への認識と要求の高まりに加え, 昨年12月に厚生省が歯科用漂白剤として認可を行ったことにより, 歯科臨床に急激に普及しつつある。この処置については, 自由診療であること, 処置の大部分を患者さんが在宅で行うことという特殊性があり, 処置の予知性とその効果, 安全性についてはIC及び指導が非常に重要な要素と考えられる。そこで用法の規格化された予知性のある効果的な漂白法の実施のため, クリニカルパスを作成し, 平成14年4月の附属病院における漂白処置料金の設定時より使用している。今回, 約半年のパスの運用について生じたバリエーションについて分析し, これを反映した第二段階パスの作成を行った。

【方法】本学附属病院及びオムニデンティクス(札幌市)の2施設において行ったホームブリーチ症例14症例中について術前後の色彩変化, 患者さんの満足度などのアウトカムと治療期間, 処置等におけるバリエーションについて調査した。

【結果及び考察】パスの著しい変更や中止にいたったバリエーション発生は0例であったが, 治療期間でパスにおいて4週と規定していたものが5症例(36%)について6週と遅延が認められた。色彩変化においても6週まで処置を継続したものが大きな変化を示していた。以上の結果と, さらにオフィスブリーチとの併用を行った, パスを使用していないホームブリーチ症例も8例あり, これらを考慮してクリニカルパスに改良を加えた。

## 25. Achondroplasiaに対する歯科矯正学的観察

○山崎 敦永, 東海林貴大, 西山 博雅, 溝口 到  
(北海道医療大学歯学部歯科矯正学講座)

【目的】Acochondroplasia(軟骨形成不全症)は, 軟骨内骨形成過程の障害により四肢短縮症を主症状とする。この疾患は常染色体性優性遺伝を示し, 原因遺伝子は第4染色体短腕に位置する繊維芽細胞成長因子受容体3型(FGFR3)遺伝子の, 点突然変異により発症することが明らかにされている。頭蓋部の形態的特徴としては, 著明な頭蓋, 顔面の成長障害を伴い鞍鼻, 前額部突出などである。今回, 軟骨無形成症と診断された女兒を観察する機会を得たので, 歯科的所見について報告する。

【症例】患者は初診時年齢7歳10か月の女兒。咬み合わせが悪いことを主訴に来院した。家族歴では, 両親に血族結婚はなく, 姉, 兄, 弟の4人兄弟で両親兄弟に特記事項はなかった。既往歴: 在胎40週で帝王切開分娩, 生

下時体重3042gであった。道立小児総合保健センターにて軟骨形成不全症と診断された。現症: 初診時身長94.4cm, 顔貌は前額部が突出し, 鼻根部が陥没していた。口腔内所見では, 多発性齲蝕が認められ, 口腔衛生状態は不良であった。Hellman dental age IIIA, 前歯部に顕著な開咬が認められ, 左右臼歯関係はIII級を呈していた。口腔内X線写真所見では, 永久歯歯数には異常はなく, 上顎左側第二小臼歯に形成不全と思われる所見が認められた。側面頭部X線規格写真では, 上顎骨の後方位と下顎骨の前方位によりskeletal Class IIIを呈していた。下顎下縁平面は急傾斜を示し, long faceであった。

【考察】軟骨の成長が主である脳頭蓋底の劣成長によって上顎骨の後方位と下顎骨の前方位を生じた結果, 重度